

事例研究, 事例報告 大募集

逆瀬川 浩孝

今月はテーマによる特集は夏休みで、投稿論文を3編まとめ掲載します。1つ目はセメント工場における企業内物流の問題、2つ目はコンビニなどの配送計画を念頭においた流通の問題、3つ目はいろいろな条件が複雑にからみあっている看護婦の勤務時間割付の問題に関する論文です。いずれも解決を迫られている現実の問題があり、それに対するOR的なアプローチの有効性を実証した、あるいはその高い可能性を示唆したものです。いわばニーズオリエンテッドな論文と言えましょう。

オペレーションズ・リサーチ誌編集委員会は、このような実際の問題から発想したORの適用事例をなるべく多く掲載したいと考えています。いろいろな方々のお話を伺っていると、ORの手法は、それがORであることを意識されずに使われているという場合を含めて、じつに様々なところで使われているということが分かります。それが表に出てくるまでには様々な障害があると思われませんが、大きな壁の一つに企業秘密があるようです。

パソコンの市場争いでMACが主導権を握れなかった原因の1つはOSを公開しなかったからだ、という議論があります。MACの前身のApple IIの成功事例を同時に考えると、この議論には説得力があります。企業秘密に属する情報をあえて公開することによって一時的なマイナスはあっても、衆知を集めて進歩を加速することによるプラスの効果の方がはるかに大きいということなのでしょう。今回の論文に限らず、もっと実際のデータが書き込めればもっと突っ込んだ分析ができたはず、という論文がたくさんあります。企業の方にぜひお考えいただきたいことだと思います。

オペレーションズ・リサーチ誌に良い事例が掲載されない障害のもう1つは、OR学会では手法を主体にしたものでないと論文として認めてもらえない、という(誤った)認識が広く行き渡っているらしい、ということです。たとえば、業務に関連する固有技術の学会に行くと、企業人によるORを使った分析の発表が少なからずある、ということを企業の方から聞きますが、このような発表をOR学会に呼び込んで行かない

と、実際の事例を目にするチャンスがますます少ないものになってゆくのではないのでしょうか。

オペレーションズ・リサーチ誌編集委員会はこのような状況を打破することに積極的でありたいと考えています。投稿論文の場合は、必ずしも評価が確定していないものについて、前向きに判断していただくよう審査員をお願いしています。

また、事例「研究」という形では取り上げにくい、というものであれば、審査なしで書いていただいている「ORメモランダム」あるいは「解説」というようなコラムも用意してあります。さらに、このような問題があって困っている、ある程度の解析はしたのだがもっと突っ込んだ分析はできないか、というような問題提起をまとめていただいても構いません。

さて一方、適用事例を公表される方をお願いしたいのは、読者がどのようなことを望んでいるか、ということに常に念頭においていただきたいということです。事例研究においては、一般に如何にOR的な手法を適用できる形に持ち込むかが最も重要なポイントになります。したがって、問題の定式化にいたる「State of arts」のフレーバーを如何にうまく説明できているかということが、最大の関心事でしょう。そのためには、一般の読者に十分理解できるように(多少のデフォルメを含めて)研究の対象となっている事例の背景については、十分にわかりやすい説明が必要です。そして、適用効果の定量的な記述や実際の適用に当たって苦労した点、ソフトウェアの開発ボリュームや開発期間、関連する過去の適用例の紹介などが、特に企業サイドの読者にとっては参考になるでしょう。さらに、結論として、研究の成果を明確に自己評価することと、他の事例(あるいは業務)への展開の可能性、特に問題の定式化においての工夫を同じように適用できる例を少なくとも1~2例は示唆していただきたいものです。

ORは理論と実践が両輪になってはじめて機能する、といわれます。そのような交流の場としてオペレーションズ・リサーチ誌が有効に使われることを願ってやみません。企業側からの情報の発信が待たれます。